

修士論文概要

都市とフェスティバル

—— 演劇都市におけるウィーン芸術週間（Wiener Festwochen）の機能 ——

金 山 咲 恵

はじめに

ウィーン芸術週間（Wiener Festwochen）は、オーストリアの首都ウィーンにて毎年5月から6月にかけて開催される、世界的に注目度の高い都市型舞台芸術祭の一つである。本論文では1951年に創始されたこの歴史あるフェスティバルを一例に、フェスティバルという催しに共通する機能を定義したい。特にウィーンという大都市において行われるような、都市型フェスティバルとしての特徴に注目しながら考察していく。

また、ウィーンという都市の特殊性にも注目せねばならない。かつての帝国であり、大戦期にはナチス・ドイツとの併合を体験するなど複雑な歴史を歩んできた国の首都であるほか、劇場文化が伝統として社会の根幹に強く根付き、市政による舞台芸術への助成も手厚い演劇都市ウィーンにおいて、フェスティバルはどのように作用し得るのだろうか。ウィーン芸術週間を軸に、オーストリアおよびウィーン市の文化政策、ウィーン演劇、フェスティバルについて包括的に明らかにすることで、芸術が社会に対してどのように呼応し、いかに機能するのかという大きな問いに答えることを、本論文の最終目的とする。

第1章 オーストリア演劇概論 —国家と演劇の歴史と現在—

オーストリア演劇が大きく発展したのはハプスブルク帝国時代であり、宮廷での祝典劇やオペラ、カトリック教団劇などが催されたほか、ブルク劇場や多数の民衆劇場が建立され、オーストリア演劇の基盤が形作られた。19世紀半ばにはウィーン市への移民規制が緩和を受け、近隣諸国から多くのユダヤ人が移住し、中でもユダヤ系ブルジョワジーが文化を担い始め、19世紀末には世紀末ウィーン文化が花開き、演劇やオペレッタなどが興隆した。しかし1938年にオーストリアがナチス・ドイツと併合されると、ヒトラー政権を支持する声が高まり、ユダヤ系文化人は亡命を余儀なくされた。併合から50年が経った1990年頃より、ナチ政権下における責任を問い直す作品が頻繁に上演され始める。

第2章 フェスティバル概論 —フェスティバルの歴史と現状—

ウィーンの文脈をひとまず離れて、演劇とフェスティバル／祭りの関係を歴史的に考察すれば、両者の結びつきは古代ギリシャの大ディオニュシア祭にまで遡ることができる。その後、18世紀以降は高名な芸術家の作品を中心としたフェスティバルの開催が増え、芸術祭としての趣が高まってゆく。一方、19世紀以降はそれと並行して、音楽フェスティバルが定着してゆく。さらに第一、二次世界大戦を経て、フェスティバルは戦後欧州都市の文化的復興と関係改善という目的のもと、ヨーロッパで多く創設された。現在ではフェスティバルの有用性が認知され、世界中で開催されるようになり、開催都市ごとに多

様な役割が生まれている。

第3章 ウィーン芸術週間の歴史 —1951年から1990年代まで—

「赤いウィーン」と呼ばれる1919年から1934年の共産党市政の時期、文化国家オーストリアを実現するための施策として音楽に注目した政府によって、ウィーンでは多数の音楽祭が行われ、ウィーン芸術週間の前身となった⁽¹⁾。第二次世界大戦後には欧州への復帰を目指して連邦政府による大規模な文化政策が実施され、その一環として多くの音楽祭が復興・創始された。1951年に創始されたウィーン芸術週間も当時は市内劇場に密着した、かつ音楽劇やコンサートを中心とするプログラムを有し、戦禍で破壊された市内劇場の復興を早めるとともに、往年の音楽の都ウィーンを蘇らせることでウィーン市民のアイデンティティを心のうちに再建させたのである。

1960年代、70年代には世界中で前衛的アーティストが台頭し、フェスティバルは通常の劇場公演には組み込みづらい彼らの実験的な作品を発表するための重要な場となった。フェスティバルの役割の急速な変化に対応するため、新たに総合芸術監督のポストが設けられ、国外作品の招聘が始まる。オーストリアの文化芸術復興／振興という目的に加え、世界的な視野に基づく芸術そのものの支援という機能が生まれたのだ。1990年代に入ると、総合芸術監督に加えてジャンルごとのプログラム・ディレクターが設置されるとともに、国外の人材を積極的に起用するようになる。これによってプログラムの国際化、多様化が進み、クラウス・パイマンによるブルク劇場演劇改革と相まって、ウィーン芸術週間は大きな転機を迎える。

第4章 現在のウィーン芸術週間(1) —2000年以降の運営状況—

国籍にとらわれない人事によりプログラムの多様性も増したウィーン芸術週間において、劇場とフェスティバルの関係性も創始時から大きく変化した。現在では市内劇場のレパートリー作品をプログラムに加えることはほぼ無くなり、通常のレパートリーには入りえない海外作品や挑発的作品を上演することで、ウィーン市民が普段触れることのできない作品を提供している。文化芸術に造詣の深い市民の育成にも貢献しているのである。劇場で働く人々にとっては、膠着化しがちな劇場環境において人材交流や人材育成の場として機能し、ウィーン演劇の活性化を促している。

第5章 現在のウィーン芸術週間(2) —劇場を補完するフェスティバルとしての役割—

ウィーンの劇場は座付きの常設劇団によるレパートリー制を採っているが故に、日本の公共劇場のように国外のアーティストによる作品を上演することが容易ではない。それ故ウィーン芸術週間は、国外から招聘した作品を市民に提供する貴重な機会となっている。

劇場の創出・整備という役割もある。慢性的に劇場の不足が叫ばれるウィーンにおいて、ウィーン芸術週間は創始時よりウィーン市内の劇場を再整備する役割を担ってきた⁽²⁾。近年では、劇場ではない建物をフェスティバルの期間中のみ作品を上演する場として使用するという試みも行われている。新たな上演空間の創出は現在もウィーン芸術週間にとって重要なミッションのひとつであり、同時に新たな芸術表現を生み出し得る試みとしても機能しているといえる。

最後に、芸術による社会の問い直しという機能を挙げたい。創始時から、ウィーン芸術週間はそれぞれの時代における社会状況に対応したプログラムをウィーン市民に提供してきた。国外の人材がディレ

修士論文概要

クターを務めるようになってからは、さらに意識的に社会批判的な作品がプログラムに組み込まれるようになっていく。2000年に製作されたクリストフ・シュリンゲンジーフ演出『オーストリアを愛してね！』⁽³⁾が顕著に示しているように、パイマンが1999年まで率いていたブルク劇場が果たしていた「芸術による社会批判」という役割をウィーン芸術週間が引き継いだといえる。このように屋外や普段劇場として使われない建物を使用したり、国外アーティストによる客観的視点を盛り込んだりと、通常の劇場では容易に成し難いフェスティバルならではの仕掛けでもって、オーストリア社会の問題を顕在化するとともに観客であるウィーン市民のアイデンティティに問いを投げかけているのである。

さいごに

本論文では、ウィーン芸術週間のような都市型フェスティバルの持つ機能を整理した上、演劇都市ウィーンで開催されるフェスティバルであるがゆえの特徴的機能を見出すことを第一の目的として論じてきた。都市型フェスティバルに共通する機能としては、開催都市の文化発信、作品の製作、人材交流の場、人材育成の場、国内外アーティストの支援（作品製作、上演機会の提供、見本市としての役割）などが挙げられる。

その中でも、地方都市で開催されるフェスティバルは、観光客の誘致や開催都市のイメージ向上など、対外的な機能に特化している。一方ウィーン芸術週間は、創始時こそ戦後における文化芸術都市としての欧州復帰促進という対外目的を持っていたものの、市民を対象とするフェスティバルとして、観光資源などの経済発展や利益を追求する道具としてではなく、市民の文化的教養を育てる場、生きる力を育てる場として対内的に機能しているのだ。

また本論文では、劇場を補完するというウィーン芸術週間の機能も明らかにすることができた。常設の劇場では見られない国外の作品や前衛的作品の招聘によってウィーン演劇の活性化を図ることや、ウィーン市内における劇場の復興・創出という役割だけでなく、劇場という枠組みでは成しえない、フェスティバルならではの作品を製作することによって社会問題を顕在化させ、市民に問いかけるという機能までウィーン芸術週間は兼ね備えている。

舞台芸術は観客の目の前に、時代の経過とともに忘れ去られてしまった過去などの「不在者」を存在させることができる。ウィーンにおいては、例えば帝国時代への憧憬、帝国を失ってドイツとの併合を望んだがゆえに起こったナチス政権への加担という過ち、ユダヤ人をはじめとする今はなき被害者たちという「不在者」が、ウィーン芸術週間の中で形を与えられ、現代オーストリア社会に生きるウィーン市民のアイデンティティに訴えかけているのだ。このように、現実社会において潜在化している事柄の顕在化による社会の問い直しこそ、フェスティバルが社会に対して持ちうる最も重要な機能ではないだろうか。

注

- (1) KONRAD, Heimo, *Kulturpolitik Eine interdisziplinäre Einführung*, Wien 2011, S.66
- (2) 宮本美紀『音楽企画 舞台裏の詩学』、大阪教育大学大学院教育学研究科芸術文化専攻修士論文、1997、22頁
- (3) LILIENTHAL, Matthias, PHILIPP, Claus, *Schlingensiefs AUSLÄNDER RAUS*, Frankfurt am Main, 2000, S.14